篤「地域科学と地理学」，大石堪山「地域創造への模索」，渡辺利得「地域区分後の科学的展開」，鈴木庸夫「地域情報化における行政情報の提供と法的限界」，高橋伸夫「フランスにおける地域システムの変容」，白井哲之「県史地誌編の編さん動向とその課題」，石井英也「地理学における環境教育実践の一例」をおさめる。

大友は，地域科学の一分野である地理学の研究対象は地域空間にあり，各部門を統一的に貫く空間理論が必要であることを提唱する。これらを模式化した図があれば，よりわかりやすいのではなかろうか。

大石は，過疎山村のむらおこしの実態を検討し，中央政府からの上意下達的政策をやめ，地方自治体や住民を中心とした地域づくりの必要性を指摘した。

渡辺は，地理学や地域科学の学問的成果が地域区分後にいかに展開するかは，国際化時代を迎えた現在，地球規模での視点が必要とする。

鈴木は，地域情報化が進む中で，名誉毀損に関わる情報の法的限界を実例に従って検討し，事前に情報主体の事情聴取や弁明，第三者による検討が必要で，その法的統制の整備が望まれるとした。

高橋は，転換期を迎える西ヨーロッパの地域システムを，パリを中心としたフランスの事例を通して考察した。東ヨーロッパを含めた論考を待ちたい。

白井は，各地の県史地誌編を検討し，千葉県史地誌編には社会的視点から地域像を取り上げ，特色ある地誌編にしたいとする。県史刊行を期待する。

石井は，環境問題を地理教育に導入する理論的な視点と調査の中での事例を示した。今後は調査例ではなく，教育現場での実践例の蓄積が待たれる。

以上が，本書におさめられた論文の概要と評者の意見である。この他に「山田安彦教授履歴」と「山田安彦教授著作業績目録」を収録する。

最後に，評者の本書全体に対する意見を述べたい。それは，地域の抱える問題が今さらながらいかに複雑で，たとえそれを見つけても解決する方法を提示することが難しいということである。しかし，地域に直接関与している地理学者は，恐れずに地域から投げかけられている，または隠れている諸問題を積極的に取り上げ，総合的にとらえて回答することが役目であり基本姿勢である。このことは，山田博士の，地域の招福が地理学の使命であるとする永年の持論に共通し，千葉大教養部の総合科目設置，編著の『総合　地域の科学―水と地域のかかわり合い―』で広く知られている。また，こうした博士の地域に対する真摯な考えと多大な功績を讃え，それを受け継ぎ広めていこうとする多くの分野の先学が，日頃研鑽された高度かつ実践的な研究成果を披露された本書の意義は深い。評者は，本書をこのように解し，自らの力量も顧みず歴史地理学以外の論文もすべて評した。その結果取り違いも多いと危惧するが，お許しいただきたい。

（礒永　和貴）

杉浦　芳夫　著：

「文学のなかの地理空間――東京とその近傍」

古今書院　1992年4月

A5判　308ページ　3,200円

魅力的なタイトルの本である。おそらく文学者前田愛の著作『都市空間のなかの文学』をもじったのであろうが，人文主義地理学に多少の関心のある人はもちろん，それ以外の人でも，思わず手にとって中を覗いてみたくなることであろう。しかしながら，ヒューマニスティックな関心から本書を読み始めれば，その期待はあっさり打ち砕かれてしまう。そこに繰り広げられているのは，人文主義地理学とは別の，文学に対する著者のアプローチである。

本書の構成は次のようになっている。

1．はじめに
2．武蔵野幻景――武蔵野台地とは？
3．江戸の刻印――山の手・下町とは？
4．鷗外の東京・露伴の東京――公共施設配置とは？
5．本郷・小石川界隈――認知地図とは？
6．病める都会人の時計と洋燈――時間地理学とは？
7．帝都の近郊――農業立地論とは？
8．田舎教師の「マチ」と「ムラ」――中心地理論とは？
9．キャラメル工場への道程――空間的相互作用とは？
10．太陽のない街の形成――工業立地論とは？
11．光と影の都市空間――住宅立地論とは？
12．避暑地の出来事――空間選好とは？
13．噂が運ぶ花づくり――空間的拡散とは？
14．反乱する岸辺――環境知覚とは？
15．遠雷の場所――人間・自然環境ゲームとは？
16．「青べか」の行方――地域産業連関表とは？

まず，1章は本書の趣旨説明だが，文学云々と言ってもやはりこの著者だなと思わせる文章から早速ス

タートする。すなわち，近年の計量地理学があまりにも抽象的な空間での議論を指向し，地理学を「地離学」に至らしめる危険性をはらんでいること，地理学の理論化のためには，現実の地理空間を地理学者がいかに正しく認識するかが重要であることを指摘する。そして，文学者の仕事に典型的に見られる都市の解読を背景に，本書の目的が，「東京とその近傍を舞台にした文学をとりあげ，そこで描かれている地理空間を読む」（6頁）試みを通じて，「読者を“New Geography”の世界へ誘うことである」（4頁）と明言される。

2・3章は，文学作品を介した「東京の自然環境と歴史の概説」（6頁）である。上述の本書の目的にもかかわらず，このような章を最初に持ってきたのは，本書を一般教育の教科書として使うことを念頭に置いてのことであろうか。2章では，武蔵野の範囲や土地利用の特徴に関する国木田独歩『武蔵野』（明治31年）の引用から始まり，地理学文献に基づく武蔵野台地の地形・地質の概説が続く。そして，おもに大岡昇平『武蔵野夫人』（昭和25年）を題材にして，特に武蔵野の「はけ」地形について述べている。作者の大岡昇平が地形に造詣の深かったことにも触れられている。

3章では，永井荷風などの作品から，なかなか乾かない山の手と，乾燥してほこりっぽい下町の特徴を示し，次に江戸の町の都市計画について概説する。そして，前田愛の指摘を受けて，『東海道四谷怪談』（文政8年）の舞台が，すべて江戸の周辺部であり，そこに社会の崩壊が特徴的に表れることを述べる。さらに，永井荷風『狐』（明治42年）から明治維新以降の武家地跡の土地利用を読み，また夏目漱石『それから』（明治42年），『門』（明治43年）からは，明治末期の山の手の都市スプロールを見てとっている。下町の方では，永井荷風『すみだ川』（明治42年）が，本所・深川地区の工業化を描いたものとして引用される。最後に，関東大震災後の東京の都市計画について簡略に説明される。

4章以降は，上述の目的のように，「地理空間の解読の初歩的実践を通して，“New Geography”の諸分野に読者が接しうるように」（6頁）しようという本書の核心部分である。まず4章では，森鷗外と幸田露伴の作品を介して，公共施設配置に言及しようと試みている。その筋立ては，明治期の東京の都市問題を背景として市区改正事業が実施されることを述べ，これに意義（異議の誤りか？）申し立てを行なった人物として，森鷗外と幸田露伴をとりあげる。そして，彼らの見解を紹介する中で，鷗外の「市区改正論略」（明治23年）にある「遠心の都会は近心の都会に優れりと見ゆ」の議論から，公共施設の配置問題へと読者を導く。もっとも，明治32年の幼稚園分布図が挿入されているとはいえ，公共施設配置に関する説明は簡単であり，再び論は，後年の鷗外と露伴の見解へと進んでいる。章全体としては，公共施設配置の説明はほんの挿話程度で，鷗外と露伴の話が中心である。しかも，彼らの作品を読むというより，都市問題論者としての鷗外と露伴自身を論じているという印象が強い。

5章は，最初に「認知地図」の説明があり，鷗外『雁』に登場する岡田と漱石『三四郎』（明治41年）の三四郎が，同じ東大生でありながら認知地図の違うことを指摘する。さらにそこから，他の作品も援用して，作者である鷗外と漱石自身の空間認知能力にまで言及する（鷗外に比べて漱石の認知地図は不正確であるという）。江戸絵図もまた一種の認知地図であると述べ，最後に小学生の認知地図に関する既存の研究成果が引用されている。鷗外と漱石の対比が，認知地図の説明に効果的である。なお，磯田光一の所論によって，西を上方にしながら江戸城だけは京都に足を向ける江戸絵図を，幕府と天皇との権力関係から解釈しようとしているが，これについては矢守[1]の反論があることを付記しておく。

6章では，漱石の『門』（明治43年）のストーリーが，時間地理学の観点から解釈されている。すなわち，時間地理学が人間の行動に対する時間と空間の制約に注目するところから，主人公宗助（早稲田界隈在住？）と安之助（麹町在住）がなかなか会えない理由を，二人の通勤経路，休日，当時の電話設置状況から考証する。そして『門』においては，時間が積極的意味あいを有しているとして，既往の論著に依拠しながら時間論を論じる。さらに話は，機械時計の出現により，近代都会人が，時間に追われる生活をするようになったというところまで発展する。本章のタイトル「病める都会人の時計と洋燈」は，その辺のニュアンスを表現しているのであろう。

7章では，東京府千歳村粕谷（現世田谷区）の農村生活を綴った随筆，徳富蘆花『みみずのたはこと』（大正2年）が利用されている。まず，この作品のうち，明治40年代頃から普及したこの地の近郊農業

の描写が引用され，次に明治期の東京近郊全域の農業に関する研究を紹介する。そして，そこに明らかにされている農業的土地利用構成から，チューネンの農業立地論へと話を導く。以下は地理学史的叙述となり，圏構造論を取り入れた小田内通敏や酉水孜郎・青鹿四郎の近郊（農業）研究の紹介にページがさかれている。最後に，『みみずのたはこと』大正12年版・昭和13年版のあとがきを使って，都市化の進む粕谷の変貌が述べられている。

8章は，北埼玉（行田付近）を舞台とした田山花袋『田舎教師』（明治42年）をとりあげる。著者は，『田舎教師』の中で，第3次産業の立地が「ムラ」（三田ヶ谷村）と「マチ」（羽生・熊谷）で見事に描き分けられていることに注目する。そして，クリスタラーの中心地理論を紹介する一方で，3地区について自ら明治40年頃の中心機能構成の表を作成し，上位中心地（熊谷）が下位中心地（羽生・三田ヶ谷）の中心機能を保有する中心地の階層構造を説明している。後半は，花袋が『大日本地誌』編集を手伝う中で地理学に興味を覚え，それゆえに地域描写が精確であったという作家論になっている。

以下，スペースの都合上，各章でとりあげられているおもな文学作品名やその舞台などを挙げるにとどめておく。

9章　佐多稲子『水』（昭和37年），『キャラメル工場から』（昭和5年），東京市内
10章　徳永　直『太陽のない街』（昭和4年），東京市小石川区（現文京区）
11章　江戸川乱歩『陰獣』（昭和3年），浅草近辺
12章　谷崎潤一郎『痴人の愛』（大正13～14年），鎌倉
13章　田宮虎彦『花』（昭和39年），千葉県安房郡和田町
14章　山田太一『岸辺のアルバム』（昭和57年？），東京都狛江市
15章　立松和平『遠雷』（昭和58年？），栃木県旧横川村（現宇都宮市）
16章　山本周五郎『青べか物語』（昭和35年），千葉県浦安町（現浦安市）

以上のように本書は，「文学のなかの地理空間」を探る一方で，最終的にはニュージオグラフィーへの導入をねらったものであり，『文学から入るニュージオグラフィー入門』とでも称すべきものである。しかし，評者が本書を一読しての率直な感想は，ニュージオグラフィーの入門書というよりも，ユニークな東京（関東）の地誌ということであり，寺本[2]も同じような感想を述べている。評者が本書を評するにあたっていちばんこだわってしまうのは，まさにこの点，すなわちニュージオグラフィーの世界へ読者を誘おうという著者の目的が達せられているかどうかという点である。

読者のひとりである評者自身のことを述べれば，確かに各章の副題にあるキーワードは頭の中に鮮明に刻まれるのだが，その内容については，上述の如く，あまり印象に残ったとは言いかねる状態である。もっとも，評者のように既に地理学にどっぷりとつかっている人間にとっては，時折本書中に顔を出す地理学の理論・方法はとりたてて珍しいものではなく，それゆえにその印象がうすいという反論もあろう。しかし，たとえば評者の不案内な「人間・自然環境ゲーム」については，15章を読んでもあまりにも簡単な説明で，理解を深めることが難しかった。著者は「あとがき」で，江戸川乱歩の『陰獣』を「Burgessの同心円地帯モデルと結びつけることは地理学徒にとってたやすいことである」（306頁）と記しているが，逆に言えば，地理学の素養のない初学者や門外漢にとって，文学作品と地理学理論の結びつけは理解に苦しみ，ひいては本書が入門書の用をなさなくなるのではなかろうか。

一般的にニュージオグラフィーの入門書というものを考える時，文学という切り口は確かに目先が変わっていて，我々の興味を引くものがある。しかし，逆に，なぜそのような回りくどいことをしなければならないのかという疑問も評者にはわきおこってくる。もちろん著者は，ニュージオグラフィーの過度の抽象性を反省する意味から，このような試みを行なったのであろうが，それならば文学作品（それも戦前のもの）中の記述などより，今現在の卑近な具体例の方がよほど分かりやすいと評者は思う。

さらに，文学という切り口からニュージオグラフィーの世界に入るとしても，本書の各章をよく読むと，文学作品を読み込むことによって，そこから直接地理学的理論・方法が取り出されているとは限らないことに気づく。たとえば7章では，チューネンの農業立地論は，『みみずのたはこと』からではなく，近郊農業に関する既往の研究から導き出されているし，16章でも，『青べか物語』は開発以前と以後の浦安を描いたものとしてとりあげられるだけで，地域産業

連関表については，ディズニーランドの経済的波及効果に関する説明の延長上にある。このような場合，文学作品を読む必然性自体がなくなってくるのではなかろうか。

評者は，地理学者が研究に文学作品を利用する以上，文学作品でなければ分からない事柄の発見を期待する。教材としての利用の場合もまた，文学作品を使ったからこそ理解が容易になることを評者は望む。

ちなみに，英米の「文学地理学」を展望したNoble and Dhussa[3]は，従来の文学地理学研究を六つにグルーピングしているが，その中で最も多いのが，本書のような，文学作品を学校の地理教育の教材として利用するものであるという。しかし，彼らが授業科目として（外国）地誌を想定しているように，評者も，文学作品の教材としての利用は，地誌的な内容に関してより有効であろうと思う。上述の評者の素直な読後感は，まさに本書のそのような価値を示している。系統地理的な内容を極端にまでおしすすめたニュージオグラフィーへの導入に，文学作品はどの程度の効果をあげうるのであろうか。本書は，文学作品がニュージオグラフィー教育に有用であるか否かを占う試金石とも言えよう。

なお，あと二，三の点に触れたい。本書は，地理学的理論・見方の説明にとどまらず（それは量的には一部にすぎず），文献を豊富に引用して，さまざまな分野に筆が及んでいる（「あとがき」によれば，著者はTuanのエッセイを意識しているようである）。それは作品の地理的背景の記述であったり，既存の研究（地理学に限らない）の要約紹介であったり，時には作品論であったりして，著者の書きたいことを思うがままに書いているように見えるのだが，地理学史に関心を持つ著者らしいかと思えるのは，作者へのこだわりである。著者は，作者に地理学との関わりがある場合はもちろんのこと（大岡昇平・田山花袋など），それ以外にも作家の生い立ちや居住地，作品執筆の背景など，作家論と言えるものにまで手を広げている。もっとも，それは，「作品を作者から切り離して読むべきではない」（6頁）という立場の表れでもあろうが。

次に，書名にもある「文学」の内容についてである。一口に「文学」と言っても，完全なフィクション小説もあれば，ノンフィクション的なものもあり，また随筆・紀行文もある。さらに著者は，森鷗外が都市計画に関して書いた論文をも「文学」に含めている。これほど多種多様な「文学」を同じ次元で論じることには，評者ははっきり言って躊躇を覚える。話の枕程度のとりあげ方ならそれでもよいのかもしれないが，文学作品自体を分析しようとするならば，作品の性格を規定していく必要を評者は感じる。

第三に，細かいことだが，各文学作品の初出年次を明記していただきたかった。本書で引用した作品の書誌事項は，各章末にまとめて掲載されているが，多くは文庫本・全集などのリプリント版のようである。作品の大部分は，明治・大正・昭和前期の東京とその近傍を描いているという点において歴史地理学的史料とも言え，各作品の初出年次はデータとして整えてほしかった（ただし本文中に記載のあるものもある）。

なお，文学畑の川本三郎[4]は，著者の作品論・作家論よりも，（地理学者としては当然のことだが）本書が作品の舞台の地理的説明をしていること，文学者の見落としてきた都市近郊にも視野を広げていることに注目している。一言付記して，評を終えたい。

〔注〕

1）矢守一彦（1992）：『古地図への旅』朝日新聞社，117頁。

2）寺本　潔（1992）：「（書評）杉浦芳夫著『文学のなかの地理空間』」新地理40-1，29頁。

3）Noble, A. G. and Dhussa, R.（1990）：'Image and Substance : A Review of Literary Geography,' *Journal of Cultural Geography* 10-2, pp. 49-65.

4）川本三郎（1993）：「（書評）杉浦芳夫著『文学のなかの地理空間』」文学界1993年1月号，303～306頁。

（小田　匡保）